



大動脈瘤に対する

新しい治療

副院長 吉鷹秀範

近年、人口の高齢化あるいは生活習慣の変化に伴い、動脈硬化による疾患が増加しつつあります。動脈硬化により、細い動脈は狭窄あるいは閉塞をきたしやすく、太い動脈は動脈自体が膨らんできて動脈瘤を形成しやすくなります。すなわち大動脈に対して動脈硬化が起これば大動脈瘤を形成しやすくなります。

大動脈解離を除けば大動脈瘤のほとんどは破裂する直前まで無症状です。検診などでたまたま発見されることが多く、症状がないことから軽く見られがちです。いったん動脈瘤ができてしまうと、それが自然に縮小することはなく、多くの場合は少しずつ大きくなり、最終的には破裂にいたります。しかし破裂にいたれば救命率は不良で、突然死の原因となります。

大動脈瘤は、薬剤などの内科的治療で治すことはできません。したが

って治療の原則は外科手術となります。当院でもその手術症例数は増加傾向にあり、毎年100人以上の病客さまに対して手術を行っています。特に最近の傾向として手術を受けられる病客さまの平均年齢が次第に高くなり、昨年は80歳以上の病客さまの手術数が20%を超えました。

このような大動脈瘤に対しての外科的治療も、当院では力をいれて取り組んで来ましたが、特に低侵襲治療(体に対する負担の少ない治療)として1998年よりカテーテルを用いたステント付き人工血管(ステントグラフト)植込み手術を行ってきました。ステントグラフト留置術は開胸あるいは開腹手術を行わずにカテーテルを用いて人工血管を留置することにより大動



ステント付人工血管

脈瘤の破裂予防を行う方法です。開胸あるいは開腹を行わないため、病客さまの身体にかかる負担は極めて少なくなり、早期退院、早期社会復帰が可能となります。

従来このステントグラフトが保険医療として認められていなかったのですが、本年より保険医療としての治療が可能(認定施設のみ)となりました。現時点では腹部大動脈瘤の限られた病客さまのみとなりますが、今後ますますこの治療法は普及、発展することになると考えられます。

当院では、大動脈瘤の適切な治療が行えるよう大動脈瘤専門外来を開設し、診断、治療に取り組んでいます。胸部か、腹部かといった存在部位、瘤の大きさ、そして年齢を問わず大動脈瘤があれば、あるいは疑いがあればご相談いただければ受診当日に診断、治療法などがお示しできると考えています。

一人でも多くの病客さまに対して安全で確実な治療ができるよう今後も努力したいと考えています。

大動脈瘤専門外来

毎週火曜日午前